

## アルゼンチン・タンゴへの遙かなる道\*

中島 巖\*\*

### はじめに

ある時代の文化的事象の解明を図ろうとすれば、文化的祖先の足取り、つまり、その前住者であるヒトの移動、同化、あるいは排除の過程を読み解いていかねばならない。現存するヒトが何時、何処から渡来し、生活集団を成し、あるいは前住者を駆逐し、あるいは同化し、あるいは孤高を保つかに関する、おそらく錯綜したこれまでの事象、事実の集積の中に糸口を見い出し、一つ一つを解いていかなければならないであろう。

1880年代のアルゼンチン・タンゴという文化的かつ音楽的事象の解明をいたすべく、前住者のスペイン、アフリカからの渡来者の文化的集積を文化的祖先とみなし、新来者である多方面からの移民者たちがそれに如何に同化し、さらに発展化させ、アルゼンチン・タンゴを誕生させていったかの道程を辿ることにする。

新来者を構成する新世代のスペイン人(gallegos)、さらにイタリア人に混じる少数派のユダヤ人の存在に注目する。実は、彼らは今日に伝わるタンゴの形成、発展に大きな貢献をもたらしてきた。帰還すべき故地を棄て永久移民とならざるを得なかったユダヤ人の貢献がいかばかりであったかを探る。

そこでのユダヤ人とは、クレズマー(Klezmer)音楽という音楽文化を携えて、ロシアから到来し、1910年頃には6,000人余の移住者人口を誇った少数派の中では最大級の移民集団を成してきたアシュケナージ・ユダヤ人である。

一般に、歴史の語り方には、二通りある。通時的(diacrónico)にとらえるか、共時的(sincrónico)にとらえるか、である。が、両者の折衷型もあり得よう。

以下では、アシュケナージ・ユダヤ人がブエノス・アイレスに到来した1889年周辺時点を共時軸の原点とし、ユダヤ人がそこでの時平面上に見た事象の過去の変遷を通時軸に沿って追跡する立場をとるものとする。

なお、音楽的言及は敢えて最小限に限定し、むしろ政治、経済、文化的背景の解明に議論を限定するものとする。

---

\* 本稿での歴史展開は、包括的なものではなく、本文の議論に必要な限りのそれに限定されている。次の諸先生方、淡路七穂子氏(タンゴ・ピアニスト兼アレンジャー)、Sra. Ángela Yamaura(スペイン語)、佐藤空子氏(スペイン語)、榎山文男氏(フランス語)に深く感謝いたしたい。

\*\* 専修大学名誉教授

## 第1節 ユダヤ人の到来

*“El Tango no es una reliquia del pasado,  
es algo que pertenece a nuestros días.”*

*Daniel Barenboim*

“タンゴは過去の遺産などではなく、  
現代の財産である。”

ダニエル・バレンボイム

### 1. アッシュケナージ・ユダヤ人の到来

Daniel Barenboim は、ウクライナ(Ukraina)系ユダヤ人の両親からブエノス・アイレス(Buenos Aires)で生を受けた。父親からピアノの最初の手解きを受け、長じて Igor Markevitch, Edwin Fischer, そして Nadia Boulanger などに師事し、1950年代半ばからピアノ奏者として、1962年からは指揮者を兼ねるアルゼンチンが世界に誇る巨匠で、Igor Stravinsky(Игор Стравинский)にも比することもできよう。なぜならば、二人は、共にユダヤ系でタンゴに造詣が深く、Barenboim は、折々タンゴ・オーケストラ(orquesta de tango)を率いては演奏に、録音に励んでいる。

1889年8月、蒸気船 Wesser 号がブエノス・アイレス港に入港した。<sup>1)</sup> 下船した乗客一行の中に、安寧と仕事を求めて広大なロシアの地を後にした824人(836人説もあり<sup>2)</sup>)のユダヤ人が含まれていた。1881年の Alexandr III(Александр III)の即位から、爾来激しさを増すロシア政府による暴力と虐待、そして極貧からの逃避行であった。皇帝の暗殺後、「居住許可地域」(черта оседлости)における演劇の上演、音楽の演奏に対する禁止令は、移住を決意させる直接的動機となった。ブエノス・アイレスに上陸した一行の中に、少なからずの芸術家一族、音楽家一族が含まれていた所以は、ここにある。

上述の Wesser 号による移民一行は、アルゼンチンが制定した1853年の憲法(Constitución Nacional)と、1876年のアベジャネーダ法(Ley de Avellaneda)に促がされた移民流入の強い潮流に乗ったものでもあった。かかる Wesser 号の入港以前のアルゼンチンにユダヤ人は存在しなかったかという点、然に非ず、1500人程度が既に定住を果していた。その大部分は、フランス、ドイツ、イギリス、イタリアなどからのユダヤ人移民であった。

ここで留意すべきは、これら先住ユダヤ人、ロシアからの新参ユダヤ人は、後に見るように、アッシュケナージ(Asquenazi)・ユダヤ人であって、イベリア半島の特にポルトガルに由来するセファルディ(Sefardi)・ユダヤ人ではないということである。

ところで、ロシアからの新参ユダヤ人たちに対しブエノス・アイレスの民衆はいかなる態度で接

したのであろうか。概ね歓迎されたと推測し得るものの、強固な反ユダヤ主義(antisemitismo)の風潮に起因する悲劇も全くなかった訳ではなかった。

文筆家でもあり教育家でもあった Domingo Faustino Sarmiento 大統領(在位1868-74)は、ロマン主義文学の最高傑作といわれる '*Facundo-civilización y barbarie*' (『ファクンドー文明と野蛮』)を發表し、そこで、アルゼンチンの後進性=野蛮性を打破する手立てとして西欧文明の導入の必要性を強調し、治世の間に文明化の具体策としてヨーロッパ移民の誘致、教育の普及に尽くした。<sup>3)</sup> しかしながら、彼の創刊した *El Nacional* 紙に対し、1881年に反ユダヤ・キャンペーンを張り始めたフランス語紙 *L'Union Française* は、公然と反対する論陣を張った。

また、1889年の社会経済危機に際して、記者 José María Miro (Juan Martel) は、*La Nación* 紙に小説 '*La Bolsa*' (『株式取引所』)を執筆し、ブエノス・アイレスの市況を語り、そこで、ユダヤ人金融業者の Baron Meckser を危機を招いた張本人として名指しした。それは、ユダヤ人に対するステレオ・タイプの中傷を打ち上げる小説であった。<sup>4)</sup>

1900年頃からは、ヨーロッパから移住して来たユダヤ人は、何処から来ようが悉く 'ロシア人' のレッテルを貼られた。'ロシア人' たちは、ユダヤ人という条件だけではなくマクシマリスト (maximalista)、つまりアナキストの社会主義者とみなされ、白い眼を向けられた。したがって、暴行と虐待の精神的外傷 (trauma) を引きずるユダヤ人であること、'ロシア人' であることを気取られないように努め、ドイツ人もしくはイギリス人を名乗っていた。タンゴとの関連で言えば、大のビール党としても名高いバンドネオン奏者 (bandoneonista) Arturo Herman Bernstein は、努力の甲斐あって 'ドイツ人 (El Alemán)' と綽名され、同じく、Roberto Firpo, Osvaldo Fresedo のコンフント (conjunto) で活躍したバンドネオン奏者 José Schumajer は 'イギリス人 (El Inglés)' の綽名を頂戴していた。

彼らユダヤ人は、アルゼンチンに徐々に溶け込み、舞台俳優、劇作家、タンゴ人を含む音楽家、映画業界人、レコード業界人、楽譜出版業者、言論人として持前の才覚を開花させていく。他の人種の移民と異なり、'帰るべき故国がない' という悲壮な覚悟がそこに働いていたのかもしれない。ユダヤ人移民が永久移民とみなされた所以は、ここにある。

## 2. アシュケナージ・ユダヤ人の史的展開

自らと相手の間で会話が交せる関係に至るには、両者の間に一定の価値観や倫理観が共有されていることが最低条件となる。何らかの共通性ないし同一性の保証が要請される。

しかしながら、同一性や全体性の保証なしに、異質なものが異質のまま、差異性が露わになった中で関係し合い、共生する途を探らなければならない難題を宿命として背負い続けてきたのがユダヤ人であった。<sup>5)</sup>

19世紀末に、ヨーロッパに同化した筈のユダヤ人は、ドレフュス事件 (L'Affaire Dreyfus) に直面することになる。フランス陸軍の砲兵大尉 Alfred Dreyfus がスパイの廉で、1894年に有罪判決を受けた冤罪事件である。実態は、彼がユダヤ人であるからというだけの理由から、フランスの反ユダヤ主義者たちが、この事件を反ユダヤ主義キャンペーンに利用したに過ぎなかっただけ

だった。彼は、12年間の勾留を余儀なくされた。ドレフュス事件は、19世紀の中心思想であった啓蒙主義の自由と平等の理念が宗教と民族の差異に基づく排外主義に取って代わられたことを意味するものであった。

ロシアを後にしてアルゼンチンに移住してきたユダヤ人がこの事件に関してどれだけの認識を持っていたであろうか、ロシアの歴代皇帝の中には啓蒙君主が存在していた事実、さらには、アルゼンチンを含め中南米諸国の独立、そして建国の実現が啓蒙主義を負うフリー・メイソン系頭領カウディージョ (caudillo) の指導力に負っていたという事実、これらをアルゼンチンへの移住ユダヤ人は、心の中でどう折り合いをつけていったのか興味が尽きない。

1480年、Ivan III (Иван III) は、ロシアからモンゴル人を追放した後、アストラハン (Астрахань) を支配下に収め、キプチャク汗国の後継国家であるモスクワ大公国 (Великое Московское Княжество) の農民をヴォルガ川 (Волга)、ドン川 (Дон) の黒土地帯 (чернозёмная полоса) に移した。その後、その間隙を埋めるべく後地にポーランド、リトアニア (Литва) の農民を配した。

17世紀後半からの3回に及ぶポーランド分割 (1772, 1793, 1795) (Раздел Польши) の結果、ユダヤ人はロシア帝国に編入されることとなり、以来、ロシアの洗礼を受け、ロシア系ユダヤ人として一括されていく。

ロシアにおいて、ユダヤ人は、貴族地主と農民の間の中間階級として農場や森林の管理、居酒屋・宿屋の経営、仲介業、小売商、行商、そして手工業を生業としてそれなりの役割を担っていた。いずれも、領主、農民にとって不可欠な生業であったため、結局は、当局も彼らのロシアでの地位を安堵してやらざるを得なかった。

具体的には、1791年、旧ポーランド領、旧トルコ領の黒海沿岸、ドニエプル川 (Днипро) 以西においてのみユダヤ人の居住権が法律で認められた。いわゆる「居住許可地域」(черта оседлости) 制度の法制化である。しかしながら、この法制化の裏にある当局の真の狙いは、南部ロシアの無人ステップの開拓へとユダヤ人を駆り立てることと、ロシア人をユダヤ商人との競合から保護することにあった。

1801年、Alexandr I (Александр I) が即位し、ユダヤ人に職業の自由、大学への入学許可の恩恵が与えられた。しかし、それも束の間、次の Nikolai I (Николай I) の時代になると、デカブリストの反乱 (восстание декабристов) 関係者の処刑に端を発する反動期となり「居住許可地域」は半分にまで縮小化され、ユダヤ人青年の強制徴兵が義務付けられた。

しかし、再び事態は改善化に向かい、次の Alexandr II (Александр II) は、農奴解放 (освобождение крестьян) を実施し、産業育成のためにユダヤ人の能力とネットワークの利用化を試みた。銀行の設立、Samuel Polyakov (Самуел Поляков) の鉄道敷設事業への重用、法律、建築、医学の方面での活躍の場のユダヤ人への提供といった改革を展開した。この改革は、ユダヤ人が自らの適性を自己認識し、自己顕示していく能力の涵養に大いに寄与した。

しかしながら、皇帝の改革にも関わらず、成果は極く内輪なそれだけでなく、再び、状況は悪化の方向を辿ることになり、挙句に、Alexandr II の爆死による暗殺にまで発展した。1881年のことであった。

実は、皇帝の暗殺にユダヤ人が絡んでいたため「居住許可地域」における掠奪と虐殺、つまり、ポグロム (погром) が拡散していき、特に、キエフ (Киев) とオデッサ (Одесса) において激烈を極めた。さらに、皇帝の暗殺に一人のユダヤ人少女が連座していたことが発覚し、ロシア人大衆に反ユダヤ主義を正当化する口実を与えた。この過程で主導的役割を演じたのはマスコミであり、政府は、ただ拱手し黙視を極め込むだけでよかった。

ロマノフ王朝最後の皇帝となる Nikolai II (Николай II) の治世に入ると政府も乗り出し、「黒百人組」(черносотенство) や「ロシア人民同盟」(союз русских народников) を育成した。20世紀に入ると、これら組織がポグロム第二波を押し進めることになる。

ポグロムの発生と波及、そしてロシアの工業化始動が1881年と、期を同じくしている。単なる偶然であろうか。ロシアにとって、近代化は、近代世界とは到底太刀打ちできっこない自身の後進性 (отсталость) を思い知ることと同義であった。工業化のための社会の近代化は、必然的に社会的変革を求める過程で社会不安、社会的対立の拡大を不可避に伴なう。しかも、近代化を急げば急ぐ程、社会不安、社会的対立などの要因も急拡大する。

工業化のためには外資 (иностранная валюта) が必要とされる。ロシアは、それを Rothschilds 家を中心とするフランス資本に求めた。しかし、その導入に先立って世界金融市場におけるルーブルの交換性 (возможность обмена рубля) を確保しておかなければならない。このことは、ロシアが金本位制 (зопотой стандарт) へと移行することを意味し、そのためには、さらに、大量の金準備 (золотой резерв) が必要となる。今度は、金獲得のために、保護関税 (покровительственная пошлина) を敷き輸入を抑制する一方で、穀物輸出を低価格で行う選択をしなければならず、世界への統合のコストは、ロシアにとって極めて高いものとなった。

1883年の経済恐慌 (кризис) とともに、それまで、理論の域を出なかった反ユダヤ主義が、フランス、ドイツで実践に移された。資本、権力に対する人々の心がユダヤ人への憎悪に結びつけられ、破産、不平等、社会的貧困のどれもがユダヤ人に起因するとされた。Friedrich Engels は、反ユダヤ主義が労働者大衆の反資本主義的感情を逸らせようとするブルジョア階級の道具に使われ兼ねないとして後悔を示した。

1871年、パリで普仏戦争の損害をプロイセンと清算するための国債の募集を組織したフランスと接近し、露仏同盟を成立させ、Sergey Yul'evich Vitte (Сергей Юльевич Витте) を蔵相に据え、上からの工業化を推進する中で、フランス Rothschilds 家からの金融的便宜の恩恵は計り知れない程のものであった。また、同家は、反ユダヤ主義にも関わらずバクー (Баку) の油田 (нефтеносное поле) への投資を敢行した。

こうした近代化、工業化がユダヤ資本の支援の恩恵に浴しながら、その分コスト負担を強いられるという二律背反 (антиномия) に直面する際に、社会にとって負に映る現実から目を逸らせるための戦略としてユダヤ人がスケープ・ゴート (козёл отпущения) とされたのである。

ポグロムの嵐が吹き荒れる中、その一方で、アルゼンチン平原は、ポグロムからの逃避先であるばかりか、新たなユダヤ人の祖国にもなるだろう、とするシオニズム (Сионизм) がユダヤ人たちの間に広がりを見せていた。19世紀のシオニズムは、是が非でもパレスティナ (Palestine) に



帰還しなければならないと主張することはなかった。したがって、パレスティナでの努力を支持する傍ら、桃源郷シオン(Zion)は、アルゼンチンにおいても等しく確立され得ると説かれた。<sup>6)</sup> このシオニズム理解は、ドイツ生れユダヤ人の Maurice de Hirsch (ドイツ名 Mauritz von Hirsch (男爵)) に因るもので、彼はユダヤ人のアルゼンチン移住化に力を注いだ。すなわち、ブエノス・アイレスに到着したアシュケナージ・ユダヤ人は、すでに一端のシオニストになっていたということになる。

- 1) 本項の議論として、Judkovski [16], pp.15-18, 参照。
- 2) Freidenberg [11], p.38, 参照。
- 3) 大量移民に基づく近代化政策が社会構造の歪みを生み、アルゼンチン市民化(argentinidad)の失敗と移民・非移民間の結婚の失敗とに起因する移民労働者階級の大量出現と中産階級の抬頭が、社会的脅威の要因と化していく中、Sarmiento 政策は 'Facundo' 執筆当時のそれから後退していく。(Bletz [3], pp.56-7, 参照。)
- 4) 'La Bolsa'に関する非ユダヤ人側からの評価について、Bletz, *op. cit.*, pp.59-60, 参照。
- 5) 本項の議論として Attali [2], そして、特に、湯浅 [33] 参照。
- 6) Bletz, *op. cit.*, p.100, 参照。

## 第2節 黒人の到来

### 1. セファルディ・ユダヤ人

セビーリア(Sevilla)のサンタ・クルス(Santa Cruz)街地帯は「旧ユダヤ居住区」(la judería)であった。薄暗い旧ユダヤ人街とアンデス世界とを結びつけている確かな道筋が、ここから築かれていった。<sup>7)</sup>

中世スペインにおいて、キリスト教(cristianismo)、イスラム教(islamismo)、そしてユダヤ教(judaísmo)のそれぞれを奉ずる異質な人々同志が、異質であるがままに全体性や同一性の保証なしに共生する関係が8世紀間以上にわたって存在していた。

ヨーロッパにおける伝染病の発生が、上の関係の破綻の端緒であった。それは、ユダヤ人とハンセン病患者(leproso)の共謀によるキリスト教徒毒殺計画であり、グラナダ王(el rey de Granada)が、それに関与しているという喧伝が飛び交い、全体として反ユダヤ主義(antisemitismo)がヨーロッパ中に醸成されていった。

イベリア半島も、この動きに巻き込まれていく。1348年の黒死病(la peste negra)の発生とその半島への波及は、ユダヤ人にその病の猖獗の原因を求める人々の意識が昂じていく中、カスティーリャ(Castilla)の王位を巡るペドロ I 世残酷王(Pedro I el Cruel)と庶子の異母兄弟エンリケ・デ・トラスタマラ(Enrique de Trastámara)との間の内戦の勃発があり、ペドロ I 世がキリスト教を犠牲にしつつ、ユダヤ人を富裕化させているとするエンリケ側の政治キャンペーンが効果を発揮し、

1391年のセビーリャに対するポグロム (pogromo) の発生の遠因を形成していった。経済事情の悪化、王位を巡る内戦にともなう社会不安定化が、その要因となった。ここに、全体性、同一性の保証なしに維持されてきた、異質を異質としたままでの対話を通じたイベリア半島における異文化の共存は終焉を迎えることになった。

異文化共存の崩壊の結果、ユダヤ人は、対話の対象から監視、管理のための強制力行使の対象へと変化していった。ユダヤ人にとっての問題が、その宗教に関わるものである間は、ポグロムの脅威に対し、キリスト教への改宗を通じてユダヤ教徒から改宗キリスト教徒コンベルソ (converzo) となることで対応し得た。むしろ、新キリスト教徒として、キリスト教徒と同等の社会的権利を手に入れることができ、持前の豊かな財力を駆使して政治、経済、金融、医療の分野で目覚ましい活躍を見せ、婚姻を通じて貴族層の中に溶け込んでいく者も現れてくる。

しかしながら、新キリスト教徒たるコンベルソの急激な社会的抬頭は、旧キリスト教徒に、自らの政治・経済的機会の不正な篡奪感を抱かせ、怨恨 (resentimiento) を覚えさせることになる。ここから、ユダヤ人問題が宗教から血統へと変質を遂げることになり、コンベルソ=ユダヤ人=反社会的存在というステレオ・タイプの図式の下で、コンベルソの排除の思想が広がり、異端審問 (inquisición) という民衆の心性を支配する国家装置の誕生へと発展していった。セビーリャを流れるグアダルキビル (el Guadalquivil) 川の河畔のインキシション小路 (el Callejon Inquisición) において、1480年に最初の異端審問が実行に移されることになった。

グアダルーペ (Guadalupe) は、奇蹟の聖母像をもつ小さな町ながら、15世紀には聖ヤコブ (Jacobo) の墓があるサンティアゴ・デ・コンポステーラ (Santiago de Compostela) と遜色のない巡礼地であった。住民の10%がコンベルソであり、近隣のトルヒーリョ (Trujillo) にある大きなユダヤ共同体と接触を保っていた。秘密裡にモーゼの律法を実践していた隠れユダヤ人 (judaizante) 女性の異端審問での自白が元で、グアダルーペの町は隠れユダヤ人たちの焚刑の煙に包まれたという。

異端審問で多くのコンベルソが裁かれていく中で、教皇からカトリック両王として承認されたアラゴン王フェルナンド二世 (Fernando II el Aragon) とカスティーリャ王イザベル一世 (Isabel I la Castilla) は、1492年、グラナダ王国ナスル (Nasr) 朝の陥落の後、ユダヤ人追放令 (extrañamiento) を発布した。

ユダヤ人は、隣国ポルトガルに避難の場を求めた。ポルトガル王ジョアン二世完全王 (João II o Perfeito) は、ユダヤ人の財力を持って領内への定着を許可した。次のマヌエル一世 (Manuel I) は、当初ユダヤ人追放を要請したが、ユダヤ人の財力、知力を不可欠なものとして決議していたため、1497年、彼らを強制的にカトリックに改宗させ、国内への残留を許可した。ここに、在来のユダヤ人に加え大量のコンベルソが出現することになる。

16世紀に入ると、上のコンベルソを中心とする強力な商人階層が形成され、やがて、ポルトガル同郷者集合であるナシオン (nación) へと発展、成長していく。

15世紀からポルトガル商人は、アフリカ西海岸を南下する航海事業を展開し教皇ニコラウスV世 (Nicolaus V) から種々の特権を得ていた。その後、西海岸ギニア (Guinea) 海域への進出を図るスペインと衝突するが、両国間交渉によって両国の航海権益区域を定め、分界線を西100レグア (legua)

の子午線のさらに西へ270レグア移動させるトルデシーリャス条約(Tratado de Tordesillas)を経て、南米ブラジル海岸がポルトガル領となった。

すでに、大西洋の海の公道たるインディアス(Indias)海路が敷かれていたが、ここを通航する移住者、モノは、インディアス通商院の統制下に置かれ、黒人奴隷、水銀なども国家の独占下に置かれていたが、ポルトガル商人集団ナシオンは、すでに中南米、地中海、北欧、アフリカを包括するネットワークを張り巡らせており、スペインの国家的束縛からの脱却を図り、無力化させていった。16世紀後半には、プランテーション経営の展開にともなうその需要の急増に応えるべく黒人奴隷貿易に商業の中心を移していった。

1580年、スペイン王フェリペⅡ世(Felipe II)がポルトガル併合を果たすと隣国からユダヤ人が、再びスペイン領内に大挙して出戻り、その勢いのままアメリカ世界へと躍進を挙げていった。スペイン船の乗組員の大部分はポルトガル人(そして、ユダヤ人)で、彼らはインディアス海路でのかつての束縛から自由の身として、航海、経済活動を展開していった。スペイン王室とナシオンが結んだ独占的請負契約アシエント(asiento)は黒人奴隷貿易の柔軟な活動の展開を可能にさせた。しかし、やがて、同契約は、密貿易(contrabando)の隠れ蓑と化していくことになった。

ブラジルまでは合法的に移動可能となったナシオンの連中は、越境してブエノス・アイレスへの侵入が可能となり、そこに留まることも、アルゼンチン北部を経由して、ポトシ(Potosí)、リマ(Lima)へ北上することも容易であった。アルゼンチン北部のトゥクマン(Tucuman)地方では、登録外国人成人の124人のうち109人がコンベルソを含むポルトガル人であった。

インディアス海路に拠らずラ・プラタ(La Plata)経路でヨーロッパ製商品や黒人奴隷を運び込み、代りにポトシの銀を運び出すナシオンの密輸活動の規模の拡大は、インディアス海路を拠り所とする旧来の特権商人階級に、それまで国家に保証されてきた貿易特権に対する侵害感と、手にし得る筈の利益に対する篡奪感を覚えさせ、それは、やがてナシオンの抬頭に対する怨恨を育んでいった。

17世紀に入ると副王領ペルー(Perú)のリマ商人の破産が相次ぎ、怨恨は反動的抑圧に発展し、ナシオン勢を敵とする特権商人による組合(consulado)の結成をみる。果して、組合は、異端審問所と歩調を合わせ、自らの利権の維持を可能にするために異端審問という制度的装置を利用していった。異端審問所側も財政難にあり、運営資金確保のために、ポルトガル系商人の富を標的にした。程なく、組織としてのユダヤ系ナシオンは、ほぼペルーの地から駆逐されていった。ナシオンの中心勢力であったユダヤ人の中には、アルゼンチンないしブエノス・アイレスに定着し、奴隷所有者、奴隷商人として奴隷売買業に携わり続けていった者も少なくないと推測される。

アメリカ合衆国の綿花プランテーションにおいて、当初、ヨーロッパからの年季奉公人(indentured)が労働者の中心であったが、やがて、黒人奴隷のみが雇用されるようになる。1705年のヴァージニア(Virginia)州の奴隷法が黒人を人格権のない不動産と規定したため、雇用条件面で黒人奴隷の方が有利となっていったからである。そこでの黒人奴隷は、ファクター(factor)と呼ばれるユダヤ人奴隷商人によって斡旋・供給されていた。

ファクターの中から、財閥に成り上っていった者も出たごとくである。



未だペルー副王領に属していたリオ・デ・ラ・プラタ(Rio de la Plata)に黒人奴隷輸入に関する最初の許可が下りたのは、ブエノス・アイレス市建設の2年前、1534年のことであった。しかし、それから60年経過した1959年時点で、輸入数は232人に過ぎなかった。その後、植民者からの輸入数増加を求める再三に要請に応じて、ポルトガル奴隷業者 Pedro Gomes Reynel に対して国王は、請負契約(asiento)を許可し、以降9年間毎年600人の黒人奴隷をブエノス・アイレスに提供することを約束した。しかし、これとて、労働力に飢えた市民の要求に依るものではなかった。<sup>8)</sup>

そもそも、特定の個人にのみ請負契約を許与する体制は、アメリカ新世界での経済・商業活動全般に対する締め付けを維持しようとするスペインの商業政策の一環であったが、奴隷貿易を管理、制限する目論見は失敗に帰し、植民時代のリオ・デ・ラ・プラタの凡ゆる商業分野での密貿易の蔓延化を促がすことになった。奴隷貿易もその例外ではなかった。

アルゼンチンの不法奴隷貿易に関する最初の実態報告例は、1585年に許可なくブラジルから奴隷輸入を敢行したところを逮捕されたケースで、ツクマン司教もそれに一枚噛んでいたという御負けつきであった。輸入奴隷は没収されたが、司教は、その後20年近く密輸入を継続した。<sup>9)</sup>

密輸入でどれだけの数の黒人奴隷がブエノス・アイレスに送り込まれたかは定かでないが、1606-25年の間に、ブラジルからは、12,778人が送り込まれ、その中、合法的手続を経たのは、僅かに288人であったとする数字が残されている。<sup>10)</sup>

不正密輸入の手口は、当局の黙認がなければ起り得ないものであった。常套の手口は、奴隷を積んだ船をブエノス・アイレスに入港させると、船体に破損が生じたので出港前に修繕して欲しい、と訴えるところから始まる。修繕中に、夜陰に乗じて、黒人奴隷を下船させ、一旦、市外に連れ出し、その後、市中に連れ戻し、迷子奴隷(negros descaminados)として、輸入許可証、入国許可証もないまま、闇市場で売却するものであった。売れ残った奴隷たちは、悪臭がひどく、着衣もつけていないため路上に放置され、さ迷う中に息を引き取る者も少なくなかったごとくである。当局筋の協力なしには到底実行不可能な手口であった。<sup>11)</sup>

ブエノス・アイレスは、交易と若干の農業に依存する経済規模の小さい都市であったから、ブラジルやカリブ沿岸国のプランテーション経済にとっては欠かせない大量の奴隷労働力を、端から必要としていなかった。アルゼンチン中・北部、パラグアイ(Paraguay)、チリ、ペルーといった広大な後背地(hinterland)のための受け入れ港の役目を担っていたに過ぎず、滞在しても短期間だけであって、奴隷は直ちに、最終目的地に送り込まれていった。

## 2. ユダヤ人とは誰か

紀元850年頃、ペルシャ人の著作に、ユダヤ商人に関する記述がある。ペルシャ語の radhan, すなわち‘道をよく知る者’を意味する語からの命名で、ラドハニト(radhanites)と呼ばれた。彼らは、ローマ帝国崩壊後、7世紀頃から交易に主導的役割を演じていた。北アフリカのサス・アル・アクサ(Sus-al-aqsa)から、一方ではアラビア半島を含むペルシャ王国の各都市、もう一方ではコルドバ(Cordoba)、フランク王国領を経て、インド、コーカサス、そして、スマトラ(Sumatra)、中国にまで足を延ばしていた。注目すべきは、中国へ少女奴隷が送られていたことである。<sup>12)</sup>

1481年、祖先の信仰に忠実であったがために、一人の改宗ユダヤ人が異端審問に掛けられ、火刑台に送られた。それを手始めに、ユダヤ人の火刑台送りが頻繁となる。虐殺の審判を下したのは、異端大審問官 Tamas de Torquemada であった。彼は、スペインのドミニコ会士の神学者であったが、異端審問の厳格化を求め、少くとも2000名の異端者を焚殺したと言われる。彼自身、ユダヤ系の出自を持っていたが、ユダヤ教徒、イスラム教徒を国家の危険分子であるとみなしてのことで、1492年の25万人のユダヤ人の国外追放の手引をした。

追放ユダヤ人は、各地に離散していく。モロッコ (Morocco) からマグレブ (Maghreb) を経て、エジプト、シリア、さらにギリシャ、オスマン・トルコ (Turquía Osmanlí) へ、ギリシャに上陸した者の一部は、ベオグラード (Belgrade) を経てウィーン、ブダペスト、クラクフ (Kraków) へ、また、ある者はイタリア各地へ、ある者はフランス西岸沿いに北上し、ある者はポルトガルを経て北ヨーロッパの低地地方 (Nederlanden)、ハンブルグ、そして新大陸へと流れていった。かかる流れを辿ったユダヤ人分派は、セファルディ (Sefardi)・ユダヤ人と呼ばれる。

17世紀末になると、セファルディ・ユダヤ人に遅れてアムステルダム、ハンブルグ経由でドイツからやって来るもう一派がロンドンにユダヤ共同体を築くに至った。1292年以後、公式的にはイギリスにユダヤ人は存在しないことになっていたが、16世紀にはロンドンに秘かに居住し、小規模な共同体が築かれていた。が、1609年に消滅した。

17世紀半ば、改宗ユダヤ人が、再度、小規模共同体を築いたが、清教徒は「旧約聖書」を尊重したためユダヤ人には好意的であり、改宗ユダヤ商人 Antonio Fernandez Calabajal は、革命下にある Oliver Cromwell 政府にとっての大陸に関する貴重な情報源となっていた。

しかしながら、これら分派も、ロンドンに到来したの頃には、人口規模的にも経済力においても、先着のセファルディの後塵を拝していた。したがって、社会的地位も相対的に低く、行商を業いとしていた。しかし、18世紀後半になると、その数を増やし、セファルディと協同行動を取り得るまでになり、19世紀には、遂に立場の逆転を果たすに至る。

近代に入って、スペインから北ヨーロッパに北上したセファルディが、先ず、経済の中心に座を占めていたが、もう一つの分派が、広範囲化しつつあったキリスト教国による迫害を免れるべく東方移動を開始した。北ヨーロッパ、さらにポーランド (Polska)、リトアニア (Lietuva) にまで移動した。ユダヤ人のこうしたもう一つの分派は、アシュケナージ (Ashkenazi)・ユダヤ人と呼ばれる。

こうしたアシュケナージの東方移動は、ドイツを中心とする中央ヨーロッパにユダヤ人空白地帯をつくり出し、中世来の共同体を維持できたのは、フランクフルトなど数える程でしかなく、他の地域では、ゲットー (ghetto) に収容されていった。

しかしながら、この中央ヨーロッパの空白地帯が、16世紀になると経済の中心地に成り上がっていく。オスマン・トルコ、オランダ、イギリス、そして、ポーランド、リトアニアを結ぶ交易ネットワークの形成が、与かって力があつた。交易品に奢侈品が含まれるとともに、土地の貴族が交易相手となり、17世紀には、アシュケナージ・ユダヤ人の中から Rothschilds 家、Goldschmidt 家のように宮廷ユダヤ人 (Hof juden) として国家、宮廷、軍隊の御用を勤める者も輩出する。

15,16世紀の西ヨーロッパのキリスト教国からの迫害は、ユダヤ人人口を東方、ポーランド、リトアニアに向かわせたのは前述のごとくであるが、これに対して、17世紀半ば以後、東ヨーロッパでの迫害は、逆に、ユダヤ人を今度は西方に移動させる契機となる。やがて、移動数は増加し続ける。ユダヤ人内部におけるアシュケナージの爆発的人口増加が移動の増加の原因となることは明らかであるが、翻って、何故に、かかる爆発的人口増加が発生したのかは、大きな謎である。

10世紀頃に、ポーランドに出現したユダヤ人は、奴隷商人であった公算が強い。中期ラテン語で、奴隷を *sclāvus* と呼び、現代スペイン語でも、*esclavo* と呼ぶ。*Sclāvus* はスラヴ人を意味した。おそらく、ポーランドを含むスラヴ人の奴隷市場が立ち、ユダヤ人が取り仕切っていた。そして、彼らユダヤ人の中心をハザール人 (Khazar/Xazap) が占めていたと推測される。

ハザール人は、トルコ系でカスピ海北岸から黒海北岸を7-11世紀にわたって支配していた遊牧民であり、中国史料は、可薩突厥と記す。カスピ海は元々、ハザール海と呼ばれ、その北西岸のヴォルガ河畔のイティル (Itil) を首都とした。8世紀には、ギリシャ、ベルシャからのユダヤ人避難民が流入した。全盛期には、クリミヤ半島を挟んだオルビア (Olbia) から、タマタルカ (Tamartarkha) からコンスタンチノーブルを経て、スペインのバレンシア、カルタヘナ、フランスのマルセーユ、アフリカのアルジェー、チュニスを経る交易路を通じて、獣皮、毛皮を供給した。

また、ハンガリー征服を図るマジャール人 (Magyar) に対し、ベルシャと戦うビザンチン (Byzantine) 帝国に対し軍事支援を行ない、アルメニア、グルジアにも出兵している。

960年頃、スペインとハザールのユダヤ人との間の交信が残されている。しかし、970年ロシアはハザールに侵攻し、これをギリシャに駆逐し、ロシア・ビザンチン征服軍によりハザール帝国は破壊される。遺民たちは、ロシア、ビザンチン、ヴェネチア等地地中海沿岸に四散する。そして、最も重要な点は、ハザール帝国がユダヤ教に改宗された国であったという事実である。

実は、16-18世紀にかけて見られたアシュケナージの人口の爆発的増加とユダヤ人内部での圧倒的多数化は、ハザール系ユダヤ人 (Khazar Jew) の合流に因るとする仮説が、D. M. Dunlop (1954), A. Koestler (1976) によって提示された。この仮説が妥当すれば、アシュケナージは中国史料が示唆するごとくトルコ系民族であるということになる。<sup>13)</sup>

しかるに、タルムード (Talmud) を排し、聖書に即した研究を唱えるユダヤ教の別流カライ派 (Karaism) がベルシャ、イラクから追放され中央アジア、カフカースを経て、黒海、カスピ海の北部に四散した時期が、ほぼ、ハザール帝国の出現と重なる。それが妥当するとき、ハザール帝国が採用したのはカライ派ユダヤ教である可能性も出てくる。その限りでは、アシュケナージ・ユダヤ人は、トルコ系民族ではないことになる。いずれにせよ、問題は開かれたままである。

とまれ、ブエノス・アイレスの地に足を踏み出したユダヤ人がアシュケナージ・ユダヤ人であったことに代りはない。

7) 本項の議論として、Williams [31], Fabar [9], Ferreira [10], Studnicki-Gizbert [29], そして、特に、網野 [32] 参照。

8) Andrews [1], p.23, 参照。

9) Andrews, *op. cit.*, p.23, 参照。

- 10) Andrews, *op. cit.*, p. 24, 参照。
- 11) Andrews, *op. cit.*, p. 24, 参照。
- 12) 本項の議論として Attali, *op. cit.*, Gilbert [13] 参照。
- 13) Dunlop [ 8 ], Koestler [17], および, Гумилев [14], Ивик-Ключиков [15], 参照。

### 第3節 海の彼方から

#### 1. ハバネラ

ユダヤ人のアルゼンチンへの移住が1889年に始まったことは、上で見たごとくであるが、ロシアからだけでなく、ポーランド、ルーマニア、シリア、トルコ、そしてモロッコ (Morocco) から陸続とユダヤ人の移住が続いていった。1891年には、早くもモロッコ系ユダヤ人が集会場 (Congregación Israelita Latina) を築く一方で、ロシア系は、労働者協会 (Pade Zedek/Israelite Worker's Society) を組織した。<sup>14)</sup> 他の民族が帰還できる故郷、故国をもつのに対し、ユダヤ人は戻るべき場所を封印し、ブエノス・アイレスこそが新しい故郷となるものと念じ、異質な者と同一性の保証なしに共生していかなければならないという覚悟が作用しての結果であるかもしれない。

閉塞し切ったユダヤ人の心に一縷以上の光を灯そうとする運動がロシアにおいて既に始まっており、ユダヤ人の新天地への移住の促進に与かって力があつた。上の素早い組織づくりも、究極の新天地としてイスラエル (Israel) を念頭に置いた運動の空想シオニズム (utopian Zionist ideology) の一環として位置づけられる。アルゼンチンにおいては、バヴァリア (Bavaria) 生れの Maurice de Hirsch がユダヤ人の間への同思想の普及には、この上ない力を尽くした。

不安と期待がない混ぜになった心情を抱きながらブエノス・アイレスの地を踏んだロシアからのユダヤ人が終ぞ目にした覚えのないものとして目を奪われたに違いないものの一つは、黒人の存在であった筈である。

アルゼンチンの女流画家 Teresa Pereyra は、自らの作品 '*Tango Canyengue*' (1998年) において、1900年近辺における初期のタンゴ・シーン (escena de tango) を再現している。<sup>15)</sup>

黒人男性と白人女性のペアが埠頭の石畳の上でダンスを披露している。遠景にアベジャネーダ橋 (Puente Avellaneda) が覗いている。そこは、ブエノス・アイレスのボカ (La Boca) の港である。白人のギター (guitarra) とムラート (mulato) のバンドネオン (bandoneón) が伴奏を担う。二人の水夫とアルゼンチン生れの黒人、アフロ・アルゼンチン人 (Afro-Argentino) が、そのダンスに入っている。

黒人のダンサー、黒人系の楽士、黒人の水夫、そして白人。Pereyra は、これらの民族構成を通じて、タンゴ (tango) の誕生に関わる何かを語ろうとしているに違いない。キャンバス上の主役は、取り巻き連中の視線を全身に浴びているダンサーたちである。しかし、歌手は、影も形も見せて

いない。

カンジェンゲ(canyengue)なる語は、本来、中央アフリカのキ・コンゴ(Ki-Kongo)語の‘熱で溶かされる’、つまり、‘音楽に溶け込む’を意味する動詞 *kanienge* の命令形であり、そこに、キンブンドゥ(Kimbundu)語の‘踊れ’の意味がつけ加わった。事実、コンゴでは、ダンサーの踊りが‘だれてきた’と感じたダンスの輪の中の年長者が‘胡椒を振り掛ける’の意の *twisa ndungu!* を叫び、激励を図るといふ。<sup>16)</sup>

キンブンドゥ語は、アンゴラ(Angola)のルアンダ(Luanda)で広く用いられるが、ルアンダに集結された奴隷に対しポルトガル当局はポルトガル語の使用を強要したものの、奴隷間同志でのキンブンドゥ語の使用を許した。ポルトガル人の貴婦人が家内奴隷に用事を言いつける際に、指示内容を徹底させるためにキンブンドゥ語を用いたことは興味深い。<sup>17)</sup>

上のキンブンドゥ語の採用の事例は、セファルディ・ユダヤ人が中心的に差配する黒人奴隷貿易によってブラジルに送り込まれた後、さらに密貿易によってウルグアイ(Uruguay)、ブエノス・アイレスに連れてこられた奴隷がアンゴラ出身者で構成されていたことを示唆する。近年、アンゴラの音楽家たちがタンゴ(tango)の命名がキンブンドゥ語に由来するとする主張も、俄かに由無しとし得ない。

ところで、上のカンジェンゲや後に見るカンドンベ(candombe)の起源を成すと見らせるハバナラ(habanera)がブエノス・アイレスに到着するまでの長い歴史的過程を辿っておかなければならない。

1850年代に、ハバナラは世界を席卷する様相を見せた。流行の波は、ブエノス・アイレスにも届いた。アルゼンチンへの流入経路として、少なくとも3つの場合が考えられる。1つ目は、マドリッド(Madrid)で踊った経験があるスペイン人が持ち込んだとするもの、2つ目は、輸入されたシート・ミュージック(楽譜)(partitura)に拠るとするもの、そして最後に、ややあって、キューバ、アンティル諸島(Antillas)の黒人水夫が持ち込んだとするものである。

未だ、蓄音の技術が未開発の時代には、後のレコードの役を任せたのは、楽譜であった。音楽は、楽譜を通じて伝播、再現されていった。

18世紀に、筆写譜の販売を業とする企業が出現し、やがて、印刷術の改良を俟って印刷楽譜出版業への展開を見せる。19世紀に入ると共に、ピアノ(pianoforte)の製造販売が開始され、ピアノ製造と楽譜出版は、市民社会で発展を遂げ、そして、その消費者を共有していった。

19世紀に入り、いち早くイギリス楽譜業者が世界をリードしていく。新興中産階級の抬頭とピアノ保有の普及化が、その要因である。楽譜業者は、ある程度ピアノが弾けて、楽譜が読めるブルジョア階級(bourgeoisie)の需要を当て込んで難度を抑えた編曲による見聞きのピアノ譜(sheet music)の形を選んだ。大量に生産、出版されたのが、感傷的な‘コーニー・ソング’(corny song)とミュージック・ホール(Music Hall)レパートリーであった。

最も売行きの良い楽曲に対し、楽譜業者は、‘高人気’(popular)という形容を添えた。‘ポピュ



ラー・ソング' (popular song)の誕生である。イギリスを覆ったこうした風潮はヨーロッパ各国の都市に、更には、そこから世界にへと伝播していった。同時に、各都市で、例えば、パリでミュゼット (musette)、シャンソン (chanson)、リスボン (Lisboa)でファド (fado)といった新しい民衆音楽が誕生していった。スペインで印刷、出版されたハバネラ曲の楽譜がブエノス・アイレスに持ち込まれても、それは、至極当然の成り行きであった。<sup>18)</sup>

ハバネラの誕生と伝播は、数奇な運命に弄ばれたと言っても過言ではあるまい。

17世紀、カントリー・ダンス (country dance)なる踊りが、イギリスで産声を上げた。向き合った男女の2列が輪になって踊る様式をもち、中世終期に騎士階級から解放され中小土地貴族となった中間階級たるジェントリー (gentry)の間で大流行を見、チャールズII世 (Charles II)の宮廷貴族に取り入れられるまでになった。チャールズII世は清教徒革命を避けフランスに亡命したが、Cromwellの死去後、イギリスに戻って王政復古を図る。1670年には、フランスのルイXIV世 (Louis XIV)とドーヴァー条約 (Dover Treaty)を結び、親仏、親カトリックに傾斜していく。

一方のルイXIV世は、新様式ダンスが好きであり、18世紀半ばには、コントル・ダンス (contredances)とフランス式に名を変え、サン・ジェルマン・アン・レ城 (Chateau de Saint-Germain-en-Lay)の自らの宮廷に取り入れた。従来の集団ダンスに縛られず男女カップルが自由なステップを踏めるところに新奇さを認めたからであると推察される。やがて、同じブルボン (Borbón)朝スペインに渡るとコントラダンサ (contradanza)とスペイン式命名が施される。

1697年、スペインからフランスに譲渡されたイスパニョラ島 (isla de Hispaniola)の西半分のポルトー・フランス (Port-au-Prince)の植民者たちのサロンに取り入れられた。黒人奴隷楽士 (les esclaves musiciens)は、主人たちの要求に応じてヨーロッパ・スタイルの演奏を展開する義務があった。西洋音楽の手解きを受け楽士になろうとする奴隷志望者は後を断たなかった。楽士になれば苦役から免除されるからである。音楽は、自由を下しおかれる王さながらであった。持前のリズム感の良さも手伝って、彼ら(およびその子孫)の中から手慣れの楽士が多く輩出されていく。後にハイチ (Haiti)と名を変えるサント・ドミンゴ (Santo Domingo)のフランス植民地は、20世紀の自由なペア・ダンス (pair-dances)の先駆けとなる黒人系アメリカ・ダンス (Afro-American dances)の発生土壌を提供していたのである。

ハイチの独立は、コントルダンサの急速な伝播を促がす要因の作用をした。

南アメリカ侵攻で手詰まりとなっていたスペインは、1795年に島の東半分をもフランスに譲渡せざるを得なくなった。フランス革命の熱も醒めやらぬ中、西半分が Toussaint-L'Ouverture 率いる奴隷蜂起の決死隊によって独立を獲得した。フランス革命中暗躍したフリー・メイソン (Freemason)の肩入れも、一助を成したと思われる。1804年、独立を果たした此の地は、ハイチ共和国 (La République d'Haiti)となった。ハイチの独立は、楽士を含む多くの奴隷を引き連れてのフランス人のカリブ海のスペイン領、キューバ、プエルトリコへの逃避行の引き金となった。そして、そこでもコントルダンサは急速な広がりを見せることになる。<sup>19)</sup>

コントルダンサは、キューバにおいて、装いも新たにハバネラとなって、ヨーロッパに里帰りする。

キューバに渡ったコントルダンスは現地生まれの白人(criollo)による変形が施され、ハバナ(Habana)に因んでハバネラ(habanera)となった。抱擁したままの型の男女カップルのダンスとなった。1860年までには、ボーカルが入れられ、ハバネラは歌唱形式に形を変えた。他方、リズムにシンコペーション(síncopa)がつけられ、力強いベースが曲を支え、歌詞には、市中の黒人もの売り(ambulante/vendedor)の啖呵が取り入れられてくる。

1840年に、まず、スペインのマドリードに渡ったハバネラは好評を以て迎えられ、早速、Sebastián de Iradier 作のハバネラ形式の曲‘El Arreglito’が出版される運びとなった。彼は、青年期をキューバで過ごしたバスク人(vasco)の作曲家であり、作品‘La Paloma’は、ラテン・アメリカで最も知られた歌の一つとなっている。

刺戟を受けたヨーロッパの作曲家たちが、ハバネラのリズムを取り入れた作品を発表するに至る。例えば、Georges Bizet, Manuel de Falla, Claude Debussy, Joseph Maurice Ravel, そして Erik Satie の名が挙がる。

Iradier は、その後、マドリードの王立音楽院(Conservatorio Real de Madrid)からソルフェージュ(solfeo)の首席教授の処遇を与えられ、アンダルシア風の作品を発表し続けて行く。そして、遂に、彼の作品‘El Charrán’ (ごろつき)が、1849年9月25日に、ブエノス・アイレスのビクトリア劇場(Teatro de la Victoria)で演唱された。Iradier のアンダルシア風ハバネラが、アルゼンチン民衆のハバネラに対する門戸を抉じ開けた歴史的瞬間であった。

## 2. カンジェンゲ(canyengue)

イギリスに誕生したカントリー・ダンスは長い道程を経る間に変貌を余儀なくされ、ハバネラとなって、スペインからブエノス・アイレスに辿り着いた。しかし、後に見るように、かかるハバネラの到来は、言わば表の正式ルートに拠ったそれではない。

Fernando de Assunsao は、フランスのコントルダンスがスペインに入ると、コントラダンスと呼び代えられただけでなくサルスエラ(zarzuela)を通じてスペイン化の装いを強いられていったとする。

サルスエラは、17世紀に Felipe 4世のサルスエラ宮で展開されたギターが伴うスペイン風オペレッタである。当初は王侯貴族向けのものであったが、民衆の日常生活の中に題材を求める形に変わっていった。が、ギター調弦が複弦5コースから単弦6コースに変わる18世紀には衰え始める。しかし、19世紀にギター音楽とともに復活を遂げ、18世紀マドリードにサルスエラ劇場(Teatro de la zarzuela)が建設されるに至る。

de Assunsao は、サルスエラ劇場での短い喜歌劇トナディーリャ(tonadilla)の中で、ワルツ(vals)、とりわけ、マズルカ(mazurca)と、ポルカに似た緩やかな踊りチョティス(chotis)が繰返される過程で、抱擁型が誕生していき、その際に、聴衆の勸心を惹くべく身をくねらせたり、肉欲に訴える身振りが強調される歌謡ダンス(cancionés bailadas)に変化していったとする。そうだとすれば、キューバに到着した時点でコントラダンスは、2/4拍子の抱擁型ダンスの形を成しており、それで、キューバでの市民権を獲得したことになる。

因みに、戦後、日本で初上映されたスペイン映画‘Marcelino Pan y Vino’ (邦題『汚れなき悪戯』)の音楽担当者で主題歌‘La Canción de Marcelino’ (マルセリーノの歌)の作者 Pablo Sorozábal は、

バスク人(vasco)の潜在力を大衆演劇に向けたバスク人のサルスエラ作曲家であった。

再び、Teresa Pereyraの絵画に立戻ろう。男性ダンサーが相手の女性ダンサーの手を取り、自分の腰にまで引き寄せ、頬と頬を寄せ合っている。

タンゴ史家 Lampazo は、踊りの型のいくつかを手の形で実演して見せる。<sup>20)</sup>

両手の指先を押しつけたまま、手を拡げていけば、両の手許に吊り鐘の形の三角形ができる。上体を前に傾け、屈む形に相当する。これが、カンジェンゲ(canyengue)である。次に、両手を上に上げて、平行な形のまま垂直に保つ。これがスムーズなタンゴ・リソ(tango liso)である。

同じく上体を垂直に保つものに土着のタンゴ・クリオージョ(tango criollo)がある。ラ・ボカ(La Boca)において、アルゼンチン生まれのコンパドリートと同じくアルゼンチン生まれのイタリア移民の間に生まれた最初期のタンゴのもう一つのタイプである。著名なパジャドール(payador)の Arturo de Navas が男性の相手とタンゴをやっている1903年撮影の写真が残されている。<sup>21)</sup> ここでのステップの大部分が直立で、小気味よいタンゴ・クリオージョのものである。しかし、両膝が深く曲げられ、両足が交叉している。この形は、'はさみ'(tijeras)と呼ばれるステップであり、これはカンドンベ(candombe)である。このポーズが、短かい休止(descanso)の形ケブラーダ(quebrada)となる。

ずっと後に、カンジェンゲは、Roberto Firpo, Francisco Canaro, Osvaldo Fresedo,そして Julio de Caro の楽団のベース奏者を担った黒人 Ruperto Leopoldo Thompson が編み出した弓(arco)を用いたゴルベ(golpe)奏法を指す用語にもなる。

さて、ブエノス・アイレスに着いたハバナは、地区地区の黒人のダンサーやその仲間にとって、是非挑戦してみたいダンスであった。町々のダンサーの間で競争に火が点いていく。巧くなると労働者階級連中も、アフロ・キューバ(Afro-Cubano)のビートを受け入れるが同時に変化させてみたくなる。気がつくと、ハバナのテンポが速まっていた。新しいダンス、ミロンガ(milonga)の誕生である。ミロンガは、キンブンドウ語で、言い合い(argumento)、キ・コンゴ語でダンサーの血筋(linaje)を意味する。<sup>22)</sup>

やがて、若い黒人ダンサーと、それを真似する白人、ムラート、彼らが一つになったとき、文化的に不可能であったものが可能となったもの、初期タンゴの動作カンジェンゲが生まれる。こうしたカンジェンゲの誕生は、地面に足を広げ、尻を突き出し、上体を前に傾け、顔をこわばらせるといった中央アフリカの古い踊りの姿勢と、頬を寄せ合い、相手の身体に腕を回すヨーロッパのロマン主義の形である抱擁ダンスとの合体化であると言いうことができるかもしれない。

しかしながら、カンジェンゲに見る抱擁型の始まりがサルスエラ的変容を含めたヨーロッパのロマン主義に限定されるとしたら、それは、表面的形式のみに囚われた短絡的な単線思考であると言わざるを得ない。

黒人の男女がタンゴのステップを初めて踏んだとき、動作は、気を持たせるようなへそ使いや尻の振り具合を見せながら互いの身体を近づけては離れていく動きを交互させるだけのものではあった。こうした動作は、エロティシズムと主人と使用人という人種、階級の違いを体現するものであり、到底抱擁し合うことはなかった。肌の色を同じくする彼らは、それだけで一体感を共

有し合え、敢えて抱擁し合う必要など更々なかった。

しかしながら、スペインからの独立宣言以後50年以上続いた内戦への応召を求められた際に、タンゴ抱擁が形成されていったと考えることもできる。<sup>23)</sup>

貧しいメスティゾやムラートの軍に配属された従軍慰安婦や雑役婦を兵士たちは、ぎこちなく、しかし力強く抱いた。戦闘兵士の人種構成は黒人が圧倒的に多く、次いでメスティゾがそれに続いていた。

国家統一が実現した後、ヨーロッパを見据えた港湾都市ブエノス・アイレスの利益のみを伺うような国家的同一性の形成がアルゼンチンに強く求められた。そこで、必要不可欠となったのがタンゴ抱擁であった。人種から階級への変換と農村から都市への移動とが重なり合い、港湾都市ブエノス・アイレスは輸出用牛肉製品の生産のために新たな労働力を必要としてくる。

ブエノス・アイレスは大きな村(*gran aldea*)から都市へと変貌したが、都市に向かい屠殺場や塩漬肉製造工場で働く牛追いだったクリオージョやムラートは孤独でいら立ち、不満を語るだけの人間と化していった。そして、身を置く世界が、かつての gaucho や兵士として歩き回っていたときのペースでは到底ついて行けない早さで変化していく中で、彼らには、誰とであろうが何処でであろうが、もっと抱擁することが必要となっていた。

14) Bletz, *op. cit.*, p. 100, 参照。

15) Thompson [30], p. 151, 参照。

16) Thompson, *op. cit.*, p. 158, 参照。

17) Ferreira, *op. cit.*, p. 139, 参照。

18) Martin [19] 参照。ハバネラ・ベースを用いたシート・ミュージックのピアノ楽譜の最古例は、1836年の '*La Pimentita*' なる作品で、合衆国で出版された。(Roberts [21], p. 6, 参照。)すでに、ハバネラが合衆国に取込まれていた証しを与える。

19) Blum [4], pp. 2-3, (*en française*) 参照。さらに、Daniel [7], pp. 54-5, 参照。

20) Thompson, *op. cit.*, p. 152, 参照。

21) Thompson, *op. cit.*, pp. 231-32, 参照。彼の最も名高い作品の一つ '*El Carretero*' は、彼の友人 Carlos Gardel のパリ (Paris) での大ヒット曲となった。

22) Thompson, *op. cit.*, p. 121, 参照。

23) Savigliano [26], pp. 30-1, 参照。

## 第4節 ブエノス・アイレスへの定着

### 1. カンドンベ(*candombe*)

黒人キューバ水夫は、言わば、ハバネラの使者(*mensajeros*)であった。Teresa Pereyra の絵画 '*Tango Canyengue*' の画中において、黒人と白人のペア・ダンスに見入っていた黒人水夫こそキュー

ーバ人水夫である。

キューバ人水夫の中には、ブエノス・アイレスへの旅程の途中モンテビデオ(Montevideo)のラ・プラタ川北岸に定着を果たした者も少なくない。Pobres Negros Cubanos(Poor Black Cubans, 1898), Esclavos de Habana(Slaves from Havana, 1908)のごとく彼らに肖って命名された行進楽隊(comparsas)が生まれた程である。<sup>24)</sup>

彼らのもたらしたリズムのハバネラがミロンガのそれとなり、やがて最初期のタンゴのダンス・リズムとなる。より正確に言えば、カンドンベ・ステップがハバネラに入り、その結果ミロンガに入り込み、そして、それがタンゴを生むというもう一つのタンゴ誕生ルートを形成する。

カンドンベ(candombe)なるキンブンドゥ語がブエノス・アイレスに現われ始めたのは、1830年代であり、それは、アフリカ系黒人が起ち上げた自助のダンス・クラブの名前としてであった。

中央アフリカに戻ったコンゴ愛国者たちが1840-50年代にベルギー帝国主義に反対すべく用いた際と同一の意味合いを込めた命名であった。彼らにとって、カンドンベは、黒人文化と自治を表象する表現語句であった。

ところで、西アフリカ人の生活の最高潮は葬礼であり、特に、コンゴ人は、死者は祝福を以て他界に送られるべきであるとの信念をもち、ここから、ダンスを伴う葬列形態がしたがう。アメリカ合衆国のニュー・オーリンズ(New Orleans)のジャズ葬列とは遠い親類関係に立つ。コンゴでは、ジャズではなく、ダンス、すなわち、カンドンベなのである。しかし、本来の姿のある部分は失われ、ある部分は変容されていく。

ラ・プラタ川沿岸の黒人たちが自らの集会をカンドンベと呼ぶとき、彼らの文化全体のありのままを表わしたのであり、ブエノス・アイレスに渡ったカンドンベにおいても、ダンスや音楽や集会を超えたその向こうにある民族性に対する誇りが秘められており、後に見るように、それが、当局の度重なる禁止令にもめげず見せる抵抗の原動力として作用する。

スペイン本国では、すでに13世紀にAlfonso X世賢王(Alfonso X el Sabio)によって条件付きながら、奴隷の自由化を認める法令の立法化が進められていった。にも関わらず、植民地では、聖職者も含めた植民者は、本国の意向を握りつぶし、自由化への恩恵の芽を未然に摘み取っていった。

19世紀になっても、ブエノス・アイレスの奴隷は、結局は、金銭尽くで自由を買い戻すしかなかった。しかしながら、自由を獲得したからといって不穏な動きを見せる者はいなかった。

1806-7年のイギリス侵攻に際し、参戦して軍功を挙げれば自由を与えるとする軍当局の約束に呼応して多くの黒人奴隷戦士が生まれた。しかし、戦後、約束は反故にされ、代わりにくじ引き(lotería)による自由化の決定方法が取られた結果、688人中、自由を獲得し得たのは22人しかいなかったが、自由奴隷は着実に増加していった。<sup>25)</sup>

1810年、ブエノス・アイレス生まれの移民の末、クリオージョは、執政委員会(junta)を設立し、副王から政権を奪取する革命を成功させた。一方で、奴隷の自由化、貿易の自由化、貴族からの特権の剥奪を謳う啓蒙主義思想(La Ilustración)を唱える識者の声を余所にして、奴隷自由化が招く弊害を説く声も大きかった。1789年のフランス革命に感化されたハイチの奴隷革命のブエノス・アイレスへの感染に対する恐れが、反対論者の心底にあったことは疑いの余地がない。



奴隷革命に対する恐れは、自由化された黒人系アルゼンチン人(Afro-Argentino)の路上集団ダンスであるカンドンベに対する再三の警告発動の行動に現われている。かかる路上集団ダンスに対しては、すでに、副王の治世に禁止令が出されているが、1775年に、コンゴ系黒人に対し、日曜日、祝祭日といった‘ハレ’の日におけるダンスが解禁され、1799年には、コンゴ-川河口のアンゴラの飛地のバントゥ語系のカビンダ(Cabinda)黒人に対しダンス許可が与えられる。しかし、1822年に路上ダンスが禁止され、1825年には、凡ゆる種類の集団ダンスが禁止されることになる。

集団ダンスに対する反対理由は3つのカテゴリーに大別される。まずは、道徳的理由であり、ダンスの際に見せる好色的な身体の動きが神を冒瀆するものであること、次は、黒人たちとその支援団体(cofradía)による逃亡その他の集団活動に対する金銭的支持のための資金の確保が主人の金銭に対する窃盗に依らざるを得ないこと、そして最後は、ダンスに熱中する余り、時間のこと以外考えなくなり、延いては、それが怠惰、悪への加担を招来させることがそれである。いずれも、地元上流階級の都合に直結した理由でしかないと言えよう。

古く、1770年代には、すでに、アフリカ人による民族団体(asociaciones étnicas)が誕生し始め、カンドンベに金銭的支援を施す機能の展開が見られる。1821年には、アフリカ協会(Sociedad Africana)の設立のための手続法規の立法化を政府に認めさせ、支援体制の改良、強化が図られる。しかるに、世代交替が進み、若手世代が参加して来るにつれ、アフリカ協会の保存、維持の志向が強まって、世紀が進む中で、自らのカーニバル行進楽隊(comparsas)に Los Negros Lubolos, Los Negros Munyolos といった具合に、民族(nación)を折り込んだ命名を施し、祖先の社会的組織に対する記憶の回復、維持に努める行動が勢いを増す。

黒人ダンスのうち年間の最大規模を誇るものは、三賢者の日(Día de los Reyes Magos)(1月6日)、カーニバル(Carnaval)(4旬節直前の3日間(2~3月))、復活祭(Pascua de Resurrección)(春分後の満月から最初の日曜日(3月))、クリスマス(Navidad)の4つに止めを刺す。黒人たちは胸を高鳴らせ、血を滾らせドンチャン騒ぎ(festividad)に明け暮れる。

1836年のカーニバルの期間中、ブエノス・アイレスで初めて、仮装、踊り、太鼓を揃えた行進楽隊のパレードが許可されたものの、度を越した騒音と暴力沙汰頻発の理由で再び禁止の憂き目を見ることになった。以後、路上カンドンベは衰退の一途を辿ることになり、わずかにカーニバル集団グループ・ムルガ(murga)が往時の興奮を今に伝えているのみである。しかし、そこでの踊り手は、もはや黒人ではなく、顔を煤で黒く塗りつぶした白人である。

18世紀末に、奴隷の子孫である黒人たちは、音を掻き鳴らしたり、踊ったりするために集まる場所、つまり、カンドンベが展開される場所をタンゴ(tango)と呼んでいた。また、カンドンベで用いられる打楽器の打出す打音(golpe)の擬音(onomatopeya)が、タンゴ(tan-go)であるとする巷説もある。

とまれ、即興性の高い、複雑なステップと力強いリズムに呼応して身体に捻り(contorsiones)を利かせて踊る、相手を持たない一人踊り(danza separada)であるカンドンベの、そのステップをパンパを追われたコンバドリートがからかい(burla)半分に真似して見せている間に、カンドンベはミロンガへ、そして、初期のタンゴへと名を代えていく。

アメリカ合衆国において、顔に黒塗りを施した白人がからかい半分にケーキウォーク (cakewalk) や摺り足シャフル (shuffle) を真似て笑いを取った minstrel show (minstrel show) が連想されてくる。そこでは、ユダヤ人演者も白人に分類された。それでも、演者の一人のロシア系ユダヤ人歌手 Asa Yoelson は、アイルランド風の芸名を欲し、Al Jolson を名乗ることになる。彼の歌唱スタイルは、後の Bing Crosby のそれに大きな影響を与えた。

1845年頃までは奴隷制反対の政治的姿勢を明確にしていた同ショウも、南北戦争という内戦 (civil war) の勃発の機運が高まるにつれ、演目から政治色を注意深く消し去っていく。1840年代の人気演目の一つであった 'Buffalo Gals' は、その一例である。Buffalo は、黒人を指す差別語であったという事実が仄見えてくる。<sup>26)</sup>

## 2. パジャドル (payador)

スペイン領植民地の中で最も遅い開発対象は、ラ・プラタ川流域の広大なパンパ (Pampa) 地帯であった。さらに南下すれば荒涼としたパタゴニア (Patagonia) が広がっていた。そこにあるのは、無限の中の「無」 (nada) であった。こうした「無」から建設されていったブエノス・アイレスは歴史的基盤の脆弱な「不在」 (ausencia) の町であり、秩序ある世界への憧れを孕んでいる。

19世紀も半ばを過ぎると、かつての植民地から独立宣言を突きつけられ、その上独立戦争に勝利し得なかったスペインは、19世紀末に、かつての植民地が今や意に沿わない独立国となった現実を認めざるを得なくなっていった。挫折感によって自信が押しやられた後のスペイン人の心の間隙を突いて、植民地支配の網の目を世界中に張り巡らせようとして機を窺っていたイギリスがブエノス・アイレスにやって来た。

イギリス資本の狙いは食肉、牧畜 (牛、羊)、船舶輸送、港湾設備といったアルゼンチンの産業部門をイギリス色に染め直すことにあった。

18世紀までは、パンパの大部分は先住民インディオとの混血民メスチゾ系の gaucho (gaucho) に占められ、未だ経済的開発には晒されていなかった。18世紀末まで、牧畜業は原始的で、牧草地の拡大を必要とせず、牛の用途も原始的で、皮革、獣脂が少々輸出される他は、国内消費に供され、食肉も地産地消の域を出ることはなかった。さらに、生産技術も、平原の野生牛 (cimarrón) を捕獲し、その場で剥皮するだけのものだった。

18世紀の半ば以降、皮革輸出の増加につれ、牧畜業の合理化の必要性が叫ばれていく。野生牛が都市周辺から姿を消し始め、牛飼育の生産単位としての牧場 (estancia) が登場する。このとき、牛に対する私有権の設定が不可欠となり、それに伴い、土地の私有化が促進されていく。

土地私有化への過程は、共有財産 (propiedad común) としての共有地 (terreno de propiedad común) であったパンパを大土地所有制 (latifundismo) の下に置くべく土地の囲い込み (cercamiento) 化の展開を容易にする。イギリスが世界に先駆けて推進してきた産業革命 (revolución industrial) の作業マニュアルそのものである。

大土地所有制は、成り上がった大土地所有者からの原材料調達を容易にし、パンパを追われて余剰化した gaucho を賃金労働者として吸収した都市は、上の原材料を輸出用一次製品の生産に振り向ける。人とモノの移動の容易化を狙った鉄道敷設 (construcción de ferrocarril) が、そうした過程

の加速化に拍車を掛けるという寸法である。

大土地所有制度は、パンパ社会を変貌させた。農場から辺境に追われた gaucho たちは、経済的、社会的圧迫下に置かれ、例えば、1870-71年にブエノス・アイレス州のタンディル(Tandill)でタータ・ディオスの反乱(sublevación de Tata Dios)を企てる。当初は宗教的差異に基づく農牧民の間の争いであったものが、やがて、同地への移民入植者(gringo)に向けられる血生臭い抗争へと発展する。そこには、ヨーロッパのみならず、ユダヤ人、黒人の入植民も少なくなかった。<sup>27)</sup>

イギリス資本の要求と先住民インディオのパンパの維持のそれとは相容れない。資本側に与する Julio Argentino Roca は、対先住民掃討戦(la guerra contra Indios)に打って出て最終的勝利を得る。同戦争への参戦者の中で軍功を挙げた者に対する論功行賞は、一人当たり10万エーカーの土地の無償供与であった。同時期、ブエノス・アイレス州での土地競売が引き金となって土地ブームが勃発する。土地の私有化が増々煽られていく。

パンパ地方の gaucho 音楽には、スペイン、とりわけ、アンダルシア地方とバスク地方からの影響が色濃く残されている。

アンダルシア地方由来の踊りサパテアード(zapateados)が名高い。誇らし気に踵を踏みならす形式をもつ。

真中に壇が据えられた部屋で、踊り手は、サパテアードを踏みながら、円を描いて壇に近づき、跳び越える。成功すれば良し、足が壇に当たって倒れたときには、罰金を払わされ、もう一回壇が据えられる。この間の音楽は、極く極く古い古謡であるごとくである。<sup>28)</sup>

もう一つのアンダルシアからの影響は、アンダルシア終止形(cadencia Andaluza)と呼ばれる曲の終わり方で、ラ(La)-ソ(Sol)-ファ(Fa)-ミ(Mi)と下降しながらミ(Mi)で終了するものである。

さらに、バスク地方からの影響は歌唱の仕方にある。あるメロディーが歌われ出すと、咄嗟に三度下のメロディーを歌い二重唱にしてしまうものである。剛毅は、バスク人の気質でもある。

後のタンゴとの関わりで言えば、マランボ(malambo)が想起されなければならない。踵を踏み鳴らす形式をサパテアードと共有する。ひたすら踏み続ける形態と、コンゴ語の名称から、中央アフリカ起源と推測させるが、パンパに持ち込んだのは、アンダルシア移民である。男二人が揃うとマランボ競争が始まる。1871年にマランボ合戦が一晩中続いたとの記録も残っている。<sup>29)</sup>

マランボの闘争的姿はパジャータ(payada)にも見ることができる。パジャータは、即興詩による歌合戦(contrapunto)であり、自らのギターに合わせて、問い掛け、返答を交互させるべく即興の連(estrofa)を歌い継いでいく。彼らはパジャードール(payador)と呼ばれる。唱法的には、下降メロディ(línea de melodía descendente)を唱う特徴をもつ。多くは、元々奴隷であったパンパの黒人 gaucho であり、投げ縄(lazo)、屠殺(matanza)、焼ごてによる刻印(marca)、馬の馴化(domadura)を日常的な業いとしていた。彼らが歌合戦を展開する場所が、酒場を兼ねた雑貨屋プルベリア(pulpería)である。<sup>30)</sup>

gaucho は、大草原の中で、牛肉とマテ茶(mate)を主食とした放浪生活を展開する。プルベ

リアは、彼らの生活必需品の補給や仲間同志の情報交換のための場を提供している。馬の競争、トランプ・ゲーム、闘鶏(riña de gallos)に金銭を賭けることもあるが、女性との出会いが主な目的であり、女性を巡ってライバルが登場すれば、短剣(facón)を交える刃物三昧で決着を着けねばならないこともある。そして、ここ、プルベリアこそが、パジャドールたちが歌の戦いを展開する場所であった。

プルベリアには、別の集団の出入りもあった。かつての逃亡奴隷、脱走兵、そして都市最下層民を寄せ集めた浮浪者グループがそれである。彼らは、バゴ(vagos)と呼ばれた。彼らは、先端に鉄やら石やらの重しをつけた狩猟用のインディオ式投縄(boleadoras indias)の使い手で、仕止めた獲物の獣皮を生活必需品と交換しにくる。プルベリアは、獣皮の交易所でもあった。人種的には、インディオ、スペイン系、アフリカ系の混血であり、主体は男性であるが、チナ(china)と呼ばれる女性も混じていた。カンドンベのダンス空間の‘女の部屋’(cuarto de china)の接客婦 china は、文字通り彼女たちであったかもしれない。市当局はカビルド(cabildo)なる議会を通じてバゴの取締りに乗り出すものの、今度はそれがプルベリアの商売を締めつけることになりかねない。しかし、彼らの抵抗が続き、取り締り策は悉く失敗に終わったごとくである。<sup>31)</sup>

多くのパジャドールたちの活躍の記憶が、今に伝えられている。特に、黒人 Gabino Ezeiza と白人 José Bettinotti は双璧を成す。<sup>32)</sup>

Ezeiza は、挑発的な歌を能くし、500曲以上を書き上げた。彼は、1981年に、サンチャゴ・デル・エステロ(Santiago del Estero)州南の町サン・ニコラス(San Nicolás)で、ロサリオ(Rosario)とブエノス・アイレスの間のペルガミーノ(Pergamino)出身のパジャドール Pablo J. Vázquez の挑戦を受け、これを打破った。3年後、再び、ペルガミーノのフロリダ劇場(Teatro de Floria)で対戦することとなり、1894年10月13-14日の2日間闘い続けた程であった。彼の歌唱は、タンゴ‘*El Choclo*’の作者として名高いパジャドール Ángel Villoldo のそれに多大な影響を及ぼした。‘*El Adios de Gabino Ezeiza*’なるミロンガが、1933年に Ignacio Corsini によって創唱されレコード化された。他方、Bettinotti は、悲劇の中、早逝したが、後に、タンゴ歌手 Hugo del Carril を主演とする伝記映画‘*El Ultimo Payador*’が製作されている。さらに、1940年には‘*Bettinotti*’なるミロンガが作曲家 Sebastián Piana の伴奏で Alfredo Rivera によって創唱されレコード化された。

Ezeiza の好戦性は、アンダルシア地方の地元歌手や、西アフリカのヨルバ(Yoruba)族に受け継がれる世襲的語り部グリオ(griot)からの影響を連想させるものである。<sup>33)</sup>

特に、アメリカ合衆国のアフリカ系共同体に受け継がれるダズンズ(dozens)、シグニファイング(signifying)、トースティング(toasting)、ボースティング(boosting)といった伝統話芸が想起される。例えば、ダズンズでは、二人の男児が韻を踏みながら、即興で主として相手の母親についての悪口を言い合い、それを数人の見物人が見守るといった図式の一種のゲームである。父親不在で母親の許で育てられるアフリカ系アメリカ人社会の母権的性質の表われであると見ることもできる。相手の悪口に対して、どれだけ巧妙な返答を返せるか、見物人の支持の多寡によって勝負が決せられる。現在のヒップホップ(hiphop)のフリー・スタイル(free style)、サイファー(cypher)に重ねられるかもしれない。

パジャダは、町外れ(suburbio)に辿り着くとミロンガ(milonga)に変化していった。ミロン



が、街のパジャータ(*payada pueblera*)となる。キンブンドゥ語である‘ミロンガ’なる呼称は、状況に応じて意義を違えながら融通無碍な使われ方がなされ、挙句、脈絡の乏しい多義性を孕むことになる。

禁止の憂目を幾度となく経験する過去をもつカンドンベが捻り出した工夫は、妨害を寄せつけずに踊れるダンス・ホールの開設である。アカデミア・デ・バイレ(*academias de baile*)と呼ばれ、町外れの下層階級居住区域に建てられ夜の娯楽に飢えた、主として若者を当て込んで客に取込んでいった。スラム街の住人オリジェーロ(*orilleros*)と町の周辺部住人コンパドリート(*compadritos*)が、主な客種であった。コンパドリートは、からかい半分に黒人のカンドンベのステップを真似ていく中に、ここ、アカデミアで、ペアが抱擁し合い、身体を前後に揺すり、ケブラーダ(*quebrada*)とコルテ(*corte*)、さらに、ビボリータ(*viborita*)を取入れたダンス形態ができ上っていった。ビボリータは、小さな蛇の形に足を絡めて回転させるステップで、R.E.Thompsonは、東欧ユダヤ人のホーラ(*hora*)と呼ばれる‘グレープヴァイン’(*grapevine*)のステップとの関連性を指摘する。<sup>34)</sup> グレープヴァインは、フィギュア・スケートで滑走の跡の軌跡がブドウの蔓状の曲線を描く種目に反映されている。

そして、かかるダンス形態は、売春宿(*prostíbulos*)に引き継がれていく。

Vicente Rossiは、キューバ人を含むアフリカ系アンティル諸島人(*afro-antillanos*)の水夫が持ち込んだハバナ人が‘女の部屋’(*los cuartos de chinas*)で受け容れられ、定着していったとする。<sup>35)</sup>そこは、兵営地周辺の大隊付の雑役婦が使っている部屋で、ラ・プラタ川の兩岸に点在し、黒人、ムラート、インディオ、メスチゾ、そして白人までもが、客となっていた。フランス流(*a la francesa*)とされる社交ダンスに倣って男女ペアの抱擁型ダンスが踊られていたごとくである。

### 3. コンパドリート(*compadrito*)

Teresa Pereyraの‘*Tango Canyengue*’において、白人女性ダンサーとタンゴを踊るアフリカ系アルゼンチン人、彼こそ黒人コンパドリート(*compadrito negro*)である。コンパドリートは、かつて、ダンス・ホールで黒人たちのカンドンベの踊りをからかい半分に真似して見せた連中である。そして、そこからタンゴ(*tango*)が生まれ、社会の最底層(*bajo fondo*)が屯する場から、やがてコンベンティージョ(*conventillo*)の中庭(*patio*)へと踊り継がれ、その後、中流家庭に入り込んでいく、と説かれる。しかし、その過程は、依然として闇の中である。

コンベンティージョは、5月広場(*Plaza de Mayo*)の南の中庭付きの上流エリート階級の老朽化した家屋を集合住宅用に骨組を組み替えたもので、1850年代に登場した。当初の入居者は黒人系のみであったが、広大な土地の所有の夢を抱いて入植してきたヨーロッパ移民が、その後を襲う。土地所有は、仲介者の騙り文句の空手形であることを知らされた移民たちは、例えば昼食をトウモロコシ(*choclo*)の入った水っぽい鍋料理プチェロ(*puchero*)だけで済ます程の窮乏生活を強いられた。<sup>36)</sup>

中庭は、黒人入居者の時代から集団ダンスの場であった。移民入居者たちは、アコーディオン、ヴァイオリン、ギターでヨーロッパの懐かしいダンスを踊り、細やかな憩いの時を過ごした。やがて、ここで、タンゴも踊られることになる。

しかし、衛生管理不備も手伝って、1871年に、あるコンベンティージョが黄熱症(*fiebre amarilla*)



に襲われ、他のコンベンティージョにも飛火していった。当局は、こうした事態に臨み、規制強化を図ったものの家主は、大した改善策も施すことなく、抵抗を続けた。景気上昇に見合って家賃もスライド上昇させられるから、改善を図らない方が家賃収入の増加が見込めるからである。改善がなされたのは、20世紀に入ってからであった。<sup>37)</sup>

パンパを追われ市街周辺部に住み着いた gaucho たちに身分分化が始まる。賢い親分的コンパードレ (compadre)、コンパードレの身分への志向を募らせるコンパドリート、そして狡い悪者マレーボ (malevo) へと連らなる。

ところで、ブエノス・アイレスには、かつての植民本国スペインの特徴でもある個人主義の伝統が息づいている。個人主義は、個人的関係に基づいた忠誠あるいは義務による絆の確立を意味する。部下を従がえ、代りに保護、仕事を与え、時に父親的シンボルの役を成す地方的大立者、カウディージョ (caudillo) との関係に政治的一例をみる。

スペインは、個人の意志を縛る標準的基準の設定、確立を拒んできた過去があり、そのせいで外的強制力が存在しないところで、代るべき内的規準が働かないことも多い。

また、ブエノス・アイレスには、王の名の下にすべての郷士 (hidalgo) を平等となす中世スペインに端を発する平等主義 (igualitarismo) の伝統が働いている。多くの階層から成る社会構造をもつにも関わらず、一幕劇のサイネーテ (sainete) に見られるように、人は人の上に人を作らずとする態度が民衆の支持を得ている。サイネーテは、進歩は、手を汚しての努力というよりも運とか機転から生まれるとする思いに力を借している。そうした平等主義の下で、人々は、人は誰しも社会の最高位に辿り着ける筈であると刷り込まれていく。

上の議論との関連の中で、ブエノス・アイレスにも同じ位入り組んだ主題が、スペイン、イタリア、それにクリオージョ的な「男っぽさ」(masculinidad y virilidad) なる概念から生まれ出た。19世紀の都会人が物した詩歌、演劇、小説の中から生まれた gaucho の理想型は、向こう見ずで、やたら挑戦的な勇気を殊更強調してみせた。そこでの伝説化された gaucho は、母親は大切に思っても、他の女たちを、まず肉体的性欲の対象と見てしまう。その一方で、彼らが見せる感傷、愛着からは、「男っぽさ」の世界においては受け容れられ難い程の弱々しさ、ないし優しさが覗く。

しかしながら、ブエノス・アイレスの人々は、伝説上の gaucho の挑戦性に自分を重ねて楽しむやり方の何処かに歯止めを掛けなければならなかった。

それでも、19世紀末には、上品な紳士でも、多くは、拳銃を携え、労働者の大半は、ナイフを忍ばせていた。その結果、スペイン、イタリア的伝統に後押しされた街中での「男っぽさ」の見せ合いが時に血を見る事態に発展していった。都会周辺部では、父親であり、扶養者であることに加えて、男たるもの、見ず知らずの女の尻を追いかけたり、売春宿に出入りしたり、愛を安手の感動心として斥けたりすることで「男っぽさ」を見せていくのが本来であるとする思いが増々受け容れられていった。

スペイン、イタリア、そしてクリオージョ譲りの「男っぽさ」に対する価値を一つに東ねコンパドリートがブエノス・アイレスの周辺部で跋扈する姿を見せ始めたのは、19世紀末のことであった。殊更、クリオージョのアクセントでクリオージョの語彙を使い、踵の高いブーツを履き、白い絹の

ネックチーフを首に巻き、ツバの振れた帽子(chambergó)を被るのがコンパドリートのトレード・マークであった。その生き様は、 gaucho 同様、時に歪められながら、美化されて描かれていった。コンパドリートが「男っぽさ」に加え、感傷、愛着という弱々しさ、優しさを gaucho と共有することは言うまでもない。

1880年代に、上流エリート層の子弟から成る‘おぼっちゃ’を意味する集団ニーニョ・ビエン(niño bien)が、劇場、バー、レストラン等で狼藉を繰返す事態が発生する。特に、パレルモ(Palermo)地区のそれは、不良仲間、インディアダ(indiada)と呼ばれた。コンパドリートと同じ様な所業を繰返すニーニョ・ビエンは、その片割れの存在であったが、後者がナイフ(facón)を、前者が拳を武器とする点だけが違っていた。両者の集団は、カフェ、売春宿、レストランで衝突し流血に至ることも少なくなく、最終的には警察の出動を見て決着となることが多かったごとくである。

コンパドリートの抬頭と、ブエノス・アイレスのもう一つの現象‘タンゴ’の起源とは密接に絡み合っている。このダンスは、世間からの敵意はおろか受容の余地の全くない、下町の場末、アラバル(arrabales)において、19世紀の最後の10年間の間に普及化した。この時期のタンゴは、初期タンゴとして分類され、ミロンガとの様式の違いは殆んどなく、コンパドリートの心奥に潜む悲哀の発露、告白を意図して作られていく1920年代以降のゲアルディア・ヌエバ(guardia nueva)と呼ばれるそれとは、音楽の様式を著しく異にする。

J. R. Borges は、イギリスの J. R. Kipling のラマ僧とインドを旅する少年探偵を描いた小説‘Kim’ (1901)の中の一の人のアフガン人の言葉‘俺は15歳にして、一人の男を殺し、一人の男をもうけた’を引き、闘争と官能の二つの行為は、本質的に一つの行為を表わすとした上で、アルゼンチンの場に援用し、アルゼンチン人が自らを勇者と思うとき軍人を自己と同化するのではなく、概念化された gaucho 像、コンパドリート像と同一視してしまう。アルゼンチン人は一個人であって一市民ではない。さらに、 gaucho がパンパとナイフ(facón)の民であるように、コンパドリートは都会の場末(arrabal)の民である、とする。

さらに、Borges は、音楽は、今まで知り得なかった個人の過去を暴露し、自らの身には起り得ないような不運や罪を嘆かせる力がある。そして、タンゴの使命とは、アルゼンチン人に、かつての勇敢に対する確信と勇気と名誉への欲求を費消し尽してしまったことを確信化させることである、とする。<sup>38)</sup>

上で述べたごとく、Ernesto Sabato は、ヨーロッパの一方向的関係を‘こちら側からの賞讃、向こう側からの無関心’と表現し、高々、落ちぶれたヨーロッパ人の流謫先に過ぎないという性格を運命づけられ、さらに、パンパやパタゴニアのごとく、人跡未踏とすら思われる大自然から覚える「無」(nada)感覚と背中合わせの生活環境の下では、文学は、形而上的なそれにならざるを得ない、とする。<sup>39)</sup>

「無」の下では、拠って立つ基盤の存在への確信も抱けず、不安が迷走するばかりである。上述のごとく、ブエノス・アイレスは「不在」の街であり、それ自体、虚構とすらみなし得るのも、ここにその一因を求めることができるかもしれない。

24) Thompson, *op. cit.*, p.8, 参照。

25) Andrews, *op. cit.*, p.43, 参照。

- 26) 例えば, Clarke [ 6 ], pp.1-32, Stark [28], 参照。
- 27) Rock [22], p.142, 参照。
- 28) Livermore [18], p.228, 参照。
- 29) Thompson, *op. cit.*, pp.91-2, 参照。
- 30) Sarmiento [25] (capítulo 2 y 3), 参照。
- 31) Rock, *op. cit.*, pp.47-8, 参照
- 32) Rivera [20], pp.13-27, 参照。
- 33) Gates, Jr. [12], 参照。ヨルバ族に伝わる神話, 民俗文化, 特に自己言及的な言語遊戯である‘シグニファイング’ (signifying) の伝説との関連性に注目したい。
- 34) Thompson, *op. cit.*, pp.136-7, 参照。
- 35) Salas [24], p.26, 参照。同趣の議論として, Rivera, *op. cit.*, p.13, 参照。
- 36) Scobie [27], pp.150-1, 参照。因みに, Ángel Villoldo の作品 ‘El Choclo’ は, 彼の好物だったブチエロの中のトウモロコシに因んで命名されたごとくである。
- 37) 黄熱病の終息以後, 入居者たちは他所へ転居し, 建物は投機家 (speculadores) の所有となった。コンベンティジョは, 功利主義者 J. Bentham の考案した囚人の一望監視施設パノプティコン (panopticon) の役割も期待されていたかもしれない。
- 38) J. R. Borges [ 5 ], 参照。
- 39) E. Sabato [23], 参照。

## 結び

文化は, ヒトを共に移動する。文化の交流は, ヒトの交流を俟って始まる。本来, 文化の間に優劣の別はない。しかし, 特定の判定基準が持ち込まれると, まず, ヒトの流れの方向と規模に変化が生じ, 条件が整えば, 流れが時間と共に, ある特定の経路を辿り, 収束に向かう可能性が見えてくることもあり得る。

アルゼンチンという場において, 多大な犠牲など何のその, ひたすら西欧化を急げとする判定基準の下で実現させてきた政治, 経済の収束先は, 住民の意にそぐうものであったのか, 見究めは容易ではない。

夜の帳を通して‘タンゴ港’ (puerto de tango) の街明りが見え隠れするところまで近づいている。敢えて, 入港や上陸を急ぐことはすまい。同港の成り立ちを早足に辿ってみただけでも, 文化, ヒトが波状的に押し寄せてきて, 到底, 複眼的, 複相的, また, 複線的な視座の用意なしには対応し切れない。

ユダヤ移民の目を通して, 必要ならば過去に遡りながら, 1989年周辺のブエノス・アイレスの「今」を見てきた。1920年以降のタンゴと比較をすれば, 19世紀末の出来立ての初期タンゴには, いくつもの不足点が見えてくる。その20年間余の間の変客の要因, 過程, そして展開の軌跡を, 社会, 政治, 経済の文脈の中で, そして, 音楽それ自体の文脈の中で, 探っていくことは, 我々の次の課題となろう。

## Referencia

- [ 1 ] Andrews, George Reid, *The Afro-Argentines of Buenos Aires, 1800-1900*, The University of Wisconsin Press, 1980.
- [ 2 ] Attali, Jacques, *Les Juifs, Le Monde et L'Argent*, Librairie Arthème Fayard, 2010. (的場昭宏訳『ユダヤ人, 世界と貨幣』作品社, 2015.)
- [ 3 ] Bletz, May E., *Immigration and Acculturation in Brazil and Argentina, 1890-1929*, Palgrave Macmillan, 2010.
- [ 4 ] Blum, Bruno, "Dominican Republic-Merengue, Haiti-Cuba-Virgin Islands-Bahamas-New York 1949-1962," (sleeve notes) (*en française*.)
- [ 5 ] Borges, Jorge Luis, "Una Historia del Tango," en *Evalisto Caliego*, Emecé Editores, 1955.
- [ 6 ] Clarke, Donald, *The Rise and Fall of Popular Music*, Viking, 1995.
- [ 7 ] Daniel, Yvonne, *Caribbean and Atlantic Diaspora Dance*, University of Illinois Press, 1989.
- [ 8 ] Dunlop, D. M., *History of the Jewish Khazars*, New York, 1954.
- [ 9 ] Fabar, Eli, *Jews, Slaves and the Slave Trade*, New York University Press, 1998.
- [ 10 ] Ferreira, Roquinaldo, *Cross-Cultural Exchange in the Atlantic World: Angola and Brazil during the Era of the Slave Trade*, Cambridge University Press, 2012.
- [ 11 ] Freidenberg, Judith Noemí, *The Invention of the Jewish Gaucho*, University of Texas Press, 2009.
- [ 12 ] Gates, Jr., Henry Louis, *The Signifying Monkey*, 1988. (松本昇, 清水菜穂監訳 『シグニファイイング・モンキー』南雲堂フェニックス, 2009.)
- [ 13 ] Gilbert, Martin, *The Routledge Atlas of Jewish History*, 5th edition, Routledge, 1993.
- [ 14 ] Гумилев, Л. Н. (Gumilev, L. N.), "Открытие Хазарии (Discovery of Khazar)," в *Хазары*, Алгоритм, 2008.
- [ 15 ] Ивик, Олев и Владимир Ключников (Ivik, Olev and Vladimir Klyutchnikov), *Хазары*, Ломоносовъ, 2014.
- [ 16 ] Judkovski, José, *Una Historia con Judíos*, Fundacion IWO, 1998.
- [ 17 ] Koestler Arthur, *The Thirteenth Tribe, the Khazar Empire and its Heritage*, 1976. (宇野正美訳『ユダヤ人とは誰か, 第十三支族, ハザール王国の謎』, 三交社, 1990.)
- [ 18 ] Livermore, Ann, *A Short History of Spanish Music*, Vienna House, 1972.
- [ 19 ] Martin, Tamara, "Contradanza y Habanera en La Identidad Musical Cubana," *Revista de La Union de Escritores y Artistas de Cuba*, 7, 1994.
- [ 20 ] Rivera, Jorge B., "Historias Paralelas," en *La Historia del Tango, Tomo 1*, Ediciones Corregidor, 1976.
- [ 21 ] Roberts, John Storm, *The Latin Tinge*, 2nd edition, Oxford University Press, 1999.
- [ 22 ] Rock, David, *Argentina, 1516-1987*, University of California Press, 1987.
- [ 23 ] Sabato, Ernesto, *Obras: ensayos*, Losada, 1970.
- [ 24 ] Salas, Horacio, *El Tango: Una Guía Definitiva*, Aguilar, 1996.
- [ 25 ] Sarmiento, Domingo Faustivo, *Facundo-Civilización y Barbabie*, 1948, en *Nuestros Gauchos*, GZ editores, 2005.
- [ 26 ] Savigliano, Marta E., *Tango and the Political Economy of Passion*, Westview Press, 1995.
- [ 27 ] Scobie, James R., *Buenos Aires-Plaza to Suburb, 1870-1910*, Oxford University Press, 1974.
- [ 28 ] Stark, Seymour, *Men in Blackface-True Stories of the Minstrel Show*, 2000.
- [ 29 ] Studnicki-Gizbert, Daviken, *A Nation upon the Ocean Sea: Portugal's Atlantic Diaspora and the Crisis of the Spanish Empire, 1492-1640*, Oxford University Press, 2007.
- [ 30 ] Thompson, Robert Farris, *Tango-The Art History of Love*, Vintage Book, 2005.
- [ 31 ] Williams, Eric, *From Columbus to Castro in the History of the Caribbean, 1492-1969*, André Deutsch, 1970. (川北稔訳『コロンブスからカストロまで(Ⅰ),(Ⅱ)』岩波書店, 1978.)
- [ 32 ] 網野 徹或, 『インカとスペイン—帝国の交錯』講談社学術文庫, 2018.
- [ 33 ] 湯浅 赴男, 『ユダヤ民族経済史』新評論, 1992.